

LOVE GAME

安達元一 著

(2009 年刊)

公開版

「相手はどなたでも結構です。一週間以内に結婚の約束を取り付けたら、一億円をあなたに差し上げます」“愛”というとらえどころのないものを対象とする未曾有の実験。LOVE GAME 財団はなぜこのようなゲームを始めたのか?愛を信じ、愛に絶望した人間の懊悩と狂気を描く話題作。

黒宮丈治 始まり

恋人たちが語らう耳障りの良い言葉が流れては消えてゆく……。

——愛は無条件に与える物。

——愛してる。愛してる。ずっと愛している。

——貴方がいれば、もう他に何もいらぬ。

——人生で最高の人に出逢えた。

——この世で一番大切な物は愛。

——大丈夫、浮気なんてしないから。

——お金なんてなくても、愛があれば大丈夫。

——もう好き過ぎて怖いくらい。

——君がいてくれれば、どんな困難も乗り越えられるよ。

——一生の愛を誓います。

——やっと真実の愛を見つけたわ。

それらの薄皮をむいた本質には、なにがあるのだろうか？

薄闇に染まりそうな部屋である。

高い天井からは艶やかなビロードのカーテンが降り、いくつもの時代がその上で過ぎていった年代物のパイル絨毯が足下を包む。もう何世紀も空気を変えていないような重い部屋である。壁には私のお気に入りのフェルメールとレンブラン

トが並んでいる。

その部屋はいつも、ダージリンの香りが満たされている。ヒマラヤ山脈に近いオカイティー茶園の逸品、寒さに耐えて凝縮された香りはこの世の物とは思えない芳醇さである。

細く開いたカーテンの向こうには芝生、そして小さな森が見える。榆の木、檜木の高木がびっしりと植えられ、下界の風景からここを隔絶してくれる。唯一見えるのは、最近、空に頭を出した六本木の高層マンション群だけである。

眠らない街の喧噪から、数ブロック離れただけの小さな丘陵地、その天辺の600坪ほどの土地は戦後、祖父が旧華族から譲り受けた。そして父、私と守ってきた。国の行く末さえも左右しかねない大きな密談が、ここで行われてきた。

燭台で揺れる三本の蠟燭では、この広い部屋を照らすのはかなり心許ない。薄明かりの中、マホガニーのデスクで私は考えていた。

「やっと真実の愛を見つけたわ……」

どこかの恋人たちが語っていた、薄っぺらい、なんの重みもない言葉だ。

「真実の愛」……なにが真実なんだ。

「真実の愛」……どこにあるんだ。

「真実の愛」……証明して見せてくれ。

蠟燭の朱の光に照らされた私の横顔は、悪戯を

思いついた悪魔の顔になっているのかもしれない。

そこから、私の壮大なゲームが始まった。

伊藤幸恵 日常

「もう、だって幸恵は良いわよね」

「ホント、その顔で甘えたら、男なんて選り取り見取りでしょ」

鼻にかかった甘ったるい声で私を非難する女二人。会社の同僚。

秘書課の合コンクイーン美咲、美しく咲く、とはかなり名前負け。パステルのフレアスカートで若作りするが、逆に30才と言う実年齢が悲しい60点女。

もう一人は、その友人で受付の、確か菜々美。受付を任されるだけあって、ルックスはまあまあの75点。でも、シャネルのソフトスーツが気合い入りすぎでマイナス5点の70点女。

「ああ、神様は不公平だわ」

「会社の男だってみんな、幸恵、幸恵」

唯一私が引け目を感じるのは名前、幸恵。それを知ってか、知らずか、二人は私の名前を連呼する。その甘い声と一緒にトロンとした目線で見つ

めるテーブルの向こう側には、男三人。広告代理店マンとのお食事会。お食事会という名の合コン。

紹介されたが名前も覚えていない。先輩の優男ホスト風と、後輩のマッコ体育会系君と少年風ボーイズラブ系君。出された名刺は、一流の広告代理店だったが、こんな風体の人間が社員で、あの会社は本当に一流なんだろうか、疑いたくなる。

男に興味を持たないからといって、目の前の料理にも、さほど興味は持てない。

最近、雑誌によく紹介されているヌーベルシノワの個室。雑誌と言っても、芸能人のゴシップとテレビ番組とデートコースとレストランが、ガチャガチャと誌面を汚す、コンビニで立ち読みがせいぜいの二流誌。そこで「ロマンチックな合コンにピッタリ」なんて紹介されていたのだろう。安っぽい内装に、安っぽい客層。料理も盛り付けだけは凝っているが、素材も味もイマイチの安っぽさ。

これじゃロマンスも安っぽくなる。

「幸恵ったら凄いのよ、この前なんか、別れたくないって男が会社の前にまで来ちゃって……」

60点と70点のさらなる攻撃。攻撃するのは意味がある。私の多少派手な恋愛話をネタに、自分が真面目で良い子である印象を与えようという、この手の女によくある作戦。そもそも、男と

いう生き物が、真面目で恋愛経験の少ない女が好きであると思っている時点で彼女達は間違っている。こういうときは平然と答えるに限る。

「そんなの、昔の話でしょ」

「あれ、伊藤さん否定しないんだ」

ホストと体育会とボーイズラブ、が互いに目線を合わせる。その目に光が宿る。

「ほら、多過ぎちゃって、どの男の話かしら」

「本当ですかあ」

男たちが身を乗り出してくる。目の前にいるこの三人も分かり易い人種である。この程度の店を押さえて、安い合コンをするような男は、いかにエッチが近そうかを見極めているだけ。運命の出会いになるような男がこんな所にいるわけがない。後輩の体育会とボーイズラブが光の宿った目でたたみかけてくる。

「伊藤さんって、やっぱりお盛んなの？」

「男が放っておかないでしょ？」

「今まで、何人くらい付き合った？」

くだらない質問。

「もお、幸恵ばっかり」

「ねえ」

60点と70点も、男達の興味が私に集まってしまったのが不満なようで、ふて腐れてワイングラスをいじり始める。私にとっては、いつものこ

となので別段気にもならない。私が悪いのではない、私に興味を持つ男の方が悪いのだ。

先輩のホスト風がうちの会社に来て、私に目をつけたのが1ヶ月前。同僚の美咲から切り崩してやっとこぎ着けたこの合コン。最初から気乗りしなかった。でも、私を御指名で成立しているこの合コンに「もしかして」の期待を持って参加してくる思慮のなさが、彼女たちを幸せな恋愛から遠ざけているのかもしれない。まあ、恋愛でなく、寂しさを埋め合うだけなら、このまま今晚でもOKだろうが。

「はいはい、めげない、めげない」

意味ありげな目配せをし、体育会とボーイズラブが、テレビで見かけるタレントのモノマネをして、拗ねた60点と70点を盛り上げる。その間に、ホスト風が小声で私に話しかけてくる。完全にお決まりのパターンに、私の気分は更に落ち込む。

「でも伊藤さんって美人ですよ。ボク、実は会社にお邪魔したときから一目惚れなんですよ」

もう何年も言われ飽きた台詞。嬉しくもなんともない。

「失礼」

興味が失せた私は席を立った。

田舎は北海道は苫小牧。伊藤幸恵という名前は平凡で嫌いだ、私は両親にずっと感謝していることがある。それは、こんなに可愛く生んでくれたこと。大きな瞳。長い睫。すっとした鼻。どんな表情でも思った通りに自在に作れる口元。その全部が小さな顔に納まっている。すらりと伸びた脚。高い身長。なにもしなくてもゆるくウェーブのかかった髪。物心ついたときから、私の周りで、私に好感を持たなかった男はあまり思い当たらない。化粧も知らない田舎娘だったが、あの土地では誰もが私に目を見張った。

東京の、専門学校に毛が生えたような女子短大に進んだ。人並みに大人の恋愛をした。そして深く傷ついて、私の中で何かが弾けた。化粧も覚えた。モデルとしてプロダクションにも所属した。男たちを魅了する術も覚えた。

しかし、やはり、大リーグとリトルリーグの差は埋めることは出来なかった。トップモデル達は、この世のものとは思えない美しさとオーラを醸し出しており、私のような田舎のリトルリーグで活躍した小娘くらいでは比べものにならなかった。

大学卒業後も、モデルとして四年頑張ってみたが売り物にならなかった。かといって中途半端な先輩達がやっているように、体を使って仕事をつ

ないでゆくのも気が進まず引退。女子短大卒の就職浪人扱いでは就職口もないという周囲の心配をよそに、私には自信があった。私が、モデル仕込みの愛想を振りまけば、中流企業ぐらいなら間違いなく採用される。

ということで、この赤坂にある、名前は聞いたことのある程度の化粧品会社に契約社員として潜り込んだ。そして、私にはもう一つ嬉しいことがあった。それは、大リーグから、また草野球に戻れたこと。このグラウンドなら私は抜群の名プレイヤーである。どんな相手でも思いのままに手玉にとることができる。

「あ、伊藤さん。どうもです、あの、今度よかったら二人で食事でも……」

私が、赤いルージュを引き直してトイレから出ると、いかにも偶然を装った風で、ホスト風が待っていた。

——他人にYESといわせるなら相手が恥ずかしいところを見られたときである。これを恥の効果といい、例えばトイレから出てきた瞬間に告白するとOKをもらえる可能性が大きい。

薄っぺらい、なにか心理学の本に書いてあった作戦。まったく代理店男はマニュアル好き。でも、そんな駆け引きが通用するなんて思っていると

ころが少し可愛い。

「いいけど……銀座のロオジェって行って見たかったんだ。連れて行ってくれる？ 実はもうすぐ誕生日なの。ワインはヴィンテージ1980年ものね。最高の年だって聞くから楽しみ」

ウインクして席に戻る。

これで、あの男が声をかけてくることは多分ない。三つ星レストランであるロオジェで80年ヴィンテージ、しかも、誕生日に恥ずかしくないモノを開けたら二人で30万円はくだらない。そんな計算が出来ないほどバカな男ではないし、それがポンと払えるようなサラリーをもらっている男ではない。悲しいかなそれが現実。所詮サラリーマン。私が人生を託せるほどの男とは到底思えない。

最初から予想していたが、今日の合コンも私を全くドキドキさせてくれない。どこにでもある展開に気分が悪くなってくる。テーブルのワインを煽るが、何とも知れないハウスワインの味に悪い酔い方をしそうだ。

可愛いとちやほやされて育った。なぜか知り合う男、みんな私に興味を持った。気分は悪くなかった。私は、話しても話さなくても良いのだが、男たちはみな、私が前に付き合った男の話聞き

たがった。聞き出しては落ち込み、そしてそれを
超えようと努力する。もっと素敵なレストラン、
もっとゴージャスな海外旅行、もっと高価なプレ
ゼント……みんな、競って私に与えてくれた。

男という生き物は競うのが好きである。少なく
とも、私の周りには、なぜかそれを誇示するのが
好きな男が集まった。

そして、いつしか私は「もっと」を求める女に
なった。

もっと容姿の美しい男を……。

もっと趣味の良い男を……。

もっと権力のある男を……。

もっと地位の高い男を……。

もっと安定した男を……。

もっと高収入な男を……。

もっと、もっと……。

そして今、私はわかっている。自分の商品価値
が永遠ではないことを。28才。そろそろ高値で
自分を売れる時期が過ぎる。なんとか最高値で売
り抜きたい。でも、思い出の中の男たちが簡単に
それを許さない。

——え？俺よりレベルの低い男と結婚するわけ？

妄想の声は年々大きくなる。

上等だ！。この伊藤幸恵が今までの全てをかけ

て勝負に出てやる。過去に付き合ったどんな男にも負けない最高の男をつかまえてやる。私ならきっと出来るはずだ。

「はい、はい、ひとつずつ詰めて、詰めて」

私にフラれたホスト風が、何事もなかったようにトイレから戻ってきて、私から一番遠い席に座る。押し出されるように、体育会が私の前に座る。ホスト風は、もう新しいターゲットの70点女に話しかけている。もちろん私の方を見ようともしない。

その様子を見て困惑した体育会に、私のとびっきりの笑顔をプレゼント。目をパチパチさせると、引きつり気味の笑顔が返ってくる。

ごめんなさい。貴方たち程度の男では私の相手は出来ないわ。

氷室冴 困惑

どうしてこんな事をするのか私にはよくわからない。

泣きわめいた女の人があった。うずくまったまま立ち上がれない男の人があった。怖い顔をして私の頬を叩いた女の人があった。殺してやると襲ってき

た男の人がいた……。

どうしてこんな事をするのか私にはよくわからない。

これが私の仕事だから。黒宮さんの考えることを実際にやるのが私の仕事。この仕事をして喜んでくれる人はほとんどいない。でも、黒宮さんが喜んでくれるからそれで十分。

黒宮さんの部屋はいつも紅茶のいい匂いがする。昼間でもロウソクだけが灯る暗い部屋。私は、天井から下がる長いカーテンを引き、窓を開け放って、広い芝生の緑の空気を入れたいのだけど、黒宮さんはそのまま良いと言う。このずっと変わらない空気も、黒宮さんの一部なのだそう。

私は、なぜ、黒宮さんとここで暮らしているのか、良く思い出せない。生まれた時からずっとそのような気もするし、つい最近からのような気もする。黒宮さんは、いつも私の事を優しくそんな目で見る。でも時々、悲しい目でも見る。愛しさと、苦しみが混ざったような目、なぜ、そんな目で見るのかわからない。いつも優しい目で見てくれたらいいのに。

今日、黒宮さんからメールが来た。「冴へ……」でいつも始まる。黒宮さんからのメールは、なにか特別な気分になる。黒宮さんと私は上手く説明できない感情でつながっている。

〈冴へ。昨日の嵐は凄かったね、森の木が倒れるのではないかというくらいしなって。ゴーゴーという風の音を聞いているうちに、それが耳鳴りになって、寂しい気分になった。冴に会いたくなかった……〉

最初はいつも背中ががムズムズするような始まり、悪い気分じゃない。でも続きを読んで、私の気持ちは少しふさいでしまう。

〈さて、来週からLOVE GAMEを始めたいと思う……〉

今日のメールは仕事のメールだった。仕事は難しくはない、いや簡単といってもいい。でも、気持ちが重くなる。また誰かが泣くかもしれないから。

昔もよく、気持ちが晴れなくなる時があった。そういうとき、どうしたらいいって、お姉ちゃんと言ってたっけ、思い出せない。お姉ちゃんと私はずっと一緒。パパやママはいないけど、お姉ちゃんがいるから大丈夫。お姉ちゃんは凄く綺麗。それが私の自慢。でも、私みたいになっちゃダメ、といつも言う。私はお姉ちゃんみたいになりたいのに。そういえばお姉ちゃんはどこに行ったのだろう。どこかに旅行って行ってたっけ？ お姉ちゃんはなんでなにも言ってくれないのかな。また頭が混乱してきた。薬を飲んだ方が良いかな？

〈……ということで、今回もしっかりやってくれ。
黒宮丈治〉

読み始めた頃の明るい気持ちはすっかりどこかへ行ってしまい、黒宮さんからのメールを閉じた。

今回のプレイヤーは「伊藤幸恵」という女の人だそうだ。

伊藤幸恵 誘惑

午後のカフェ。

目抜き通りに面して行き交う人は多いが、店内は隔絶されたような閑散とした世界。そして大きめのBGM。理想通り。もちろん意味があって、私がここを選んだ。ここなら周りに聞かれてマズイ話も大丈夫そうだ。そして、何より、これだけの衆人監視の中で物騒なことは起こせないだろう。

数日前。

月末の銀行口座をチェック。私は口座をふたつ持っている。日常生活用と貯蓄用。

貯蓄用にはそこそこまとまったお金が眠っている。モデル時代はギャラも悪くなかった。そしてその頃から、食事は毎夜のようにデートで男性

が食べさせてくれた。だから私の食費は昼しかかかからない。洋服も値の張る物は男性が買ってくれた。更に、モデルを辞めてからも貢いでくれる奇特な男性が沢山いる。貢ぎ物を質屋で現金化するのは日常茶飯事。だから、中流化粧品会社の契約社員のわりに、この口座には1000万円に届きそうな額が貯まっている。私の虎の子。

日常生活用の口座は、お給料が振り込まれる他、公共料金などの支払いに使っている。そして、この口座からは、少ないながら毎月、北海道の両親に仕送りもしている。ちょっと無駄遣いをしてしまい3万円しか送れない月もあるし、ちょっと頑張って10万円近く送れる月もある。一人っ子の私の学費が終わってからは、多少楽になったのだろうが、父親は田舎の零細企業の平社員、実家の家計は老夫婦二人の暮らしとはいえ贅沢は出来ないことはわかっている。

「あんたも、東京で色々かかるだろうから、無理しなくて良いよ」

母親は言う。

「気にしないでいいよ」

と言いながら、私は心の中で少し後ろめたい気分になる。

(母さん、大丈夫よ。男がいろいろ貢いでくれるから)

この日常口座に異変が起こった。今月は北海道へいくら送金出来るかをチェックするために残高照会をした。その残高が変だった。基本的に、定額の給料とほぼ定額の支払いが出入りするだけだから、この口座の残高は毎月10万円あたりをフラフラしている。なのに、今月はなぜか112万円。意味もなく嬉しくなった反面、不思議な気持ちで振り込み欄を見る。

「100万円」、この通帳ではお目にかかれない7ケタの数。振り込み主は「氷室冴」。

急いで頭の中を検索するが、高校大学時代の友人も含め、全く知らない名前。知らない間に「引き出される」というのは聞いたことがあるが、「振り込まれる」というのは前代未聞。

辺りを見回す。「銀行員に相談しよう」という思いは一瞬で否定される。

(間違いでもラッキーじゃない。このままもらえちゃうかも)

私の中の小さな悪魔がささやく。

(そうよ、貴方は何も悪くないわ。振り込む方がいけないんだもの)

そう思ったところに、携帯のメールが着信。あまりのタイミングの良さに、体がビクッと反応してしまう。そして、そのメールから、私は更に不

可思議な世界に引き込まれた。

〈御確認いただけましたようですね、今回は突然の振り込み失礼しました。これは、私共の話を聞いていただく代金です。もちろん、このまま話を聞くことなく100万円を使ってくださっても構いません。しかし、会っていただき、話を聞いてくだされば『1億円』を差し上げられるかもしれません。決して御心配されるような詐欺の類ではありませんので、伊藤幸恵さんの賢明な判断をお待ちします。待ち合わせ日時場所は御指定下さい〉

見られている。メールの内容の不思議さより、まずはそれが気になった。

さっきより真剣に辺りを見回す。銀行員はすぐ見つかるが、氷室冴は見つかるはずもない。100万円を振り込んで監視する。胡散臭い。十分に胡散臭い。普通の人なら危険信号が灯る展開。しかし、私の脳は好奇心がむくむくと首をあげた。

私はお金が大好きである。

普段は体裁を気にして堂々と言うことはないが、心の中では、私はお金が大好きと大声で叫んでも良いくらいだ。イギリスのロコ・ロンドン金取引、南アフリカのブラックマネー、モンゴルのウランバートル金山、台湾のプライベートバンク……怪しければ、怪しいほど、魅力的に聞こえる儲け話。私の周りにはいる、金の嗅覚がある男たち

が教えてくれるオイシイ情報。

儲かるのが半分、損するのが半分。金額は小さくても、話に乗ってワクワクしている瞬間が最高に好き。失敗したって、それを紹介した男に甘い声で泣きつければ、大概是穴埋めしてくれる。夢見た気持ちやしぼむだけ、命まで取られるもんじゃない。

この1億円話。こんなときめきは久しぶり。しかも、待ち合わせ日時場所は御指定下さいといふのだから相手の土俵に乗る訳じゃない。こっちの土俵に乗ってくるというのである。ヤバかったら100万円返してサヨナラするだけ、話だけでも聞いてみない手はない。

氷室冴を待つ店内は相変わらず閑散としている。

コーヒーカップについての私のルージュ。学生時代から愛用のRMK。それを唇に引いた日から私は、大人の女になることを誓った。恋愛なんて所詮ゲーム、男なんて翻弄してやる。私は世の中のオイシイところを渡り抜ける女になる。愛もお金も、思いのままに手に入れてみせる。

あの男にはむしろ感謝しているくらいだわ。

あれはプラタナスの並木が緑を吹き出す4月だった。初めての東京、初めての一人暮らし。大

学生の私は化粧も知らない田舎娘。私が通う短大は、すぐ近くに建つ名門私立大学と合同でサークルを運営することが多い。誰もが憧れる、その名門大学のキャンパスは都心にもかかわらず広大だった。いくつもの学舎をめぐって植栽された緑の並木が鮮やかさを競っていた。そこに通う学生は、誰もが洗練された都会の大人に見えた。

信州の田舎出身であるあの男も、東京の予備校で一浪しただけあって、当時の私には大人に見えた。オールラウンドサークル、軟弱なテニスと合コンがもっぱらのサークルで1年生同士として出逢った。受験勉強を乗り越え花の大学生活を手に入れると、誰もが熱病のように恋をする。私も例外でなく、あの男と付き合った。わかりやすい話、サークルの1年生の中で、私が一番可愛く、あの男が一番いい男だったから。誰もが「あの二人は付き合う」と思っていた。そんな空気を作られたら、恋したい盛りの二人に火がつかない理由はない。

熱病の恋はすぐ燃え上がる。ここで童貞と処女を失うケースも少なくない。男も童貞だった、私は処女ではなかったが。そして熱病の恋は、往々にしてすぐ冷める。夏の終わりがその時期。だが私たちは、周囲の予想に反して長続きした。紅葉も、クリスマスも、正月も、そして次の桜の季節

も、男のアパートで過ごした。

男の純朴さが好きだった。長野県ではそこそこ有名な地主の一人息子である男は、小さい頃から「坊ちゃん」と呼ばれて育った。周りの多くの人たちが、男に一目置き気を使う生活の中で、傲慢になることなく逆にのんびりとした性格に育った。競争も、不満もない。人を疑うことも、出し抜くことも、嫉妬することも、陥れることも知らずに真っ直ぐに育った。男の母親に感謝しなくてはならないかもしれない。

北海道育ちの私も、そんな男の性格がしっくり来た。二人の口癖が「なんか東京の人は分からないね」。そう、私たちにとっては、この東京はまるで異国の地だった。同じ格好をして、同じ言語を喋って、同じ食べ物を食べているが、東京の人たちはどこか理解できない、そんな気持ちの奥にあった。だから男といつも一緒にいた。一緒にいると楽だった、落ち着けた、楽しかった。

あの男の事を好きになるのに理由はなかった。ただ空気のように好きになった。それだけだった。

卒業したら結婚しよう。どちらからともなく約束した。二人にとっては、疑いようのないごく自然の流れだった。

そして、大学2年の夏、あの事件が起こった。「幸恵。先月東京へ出てきた俺の親友。理由を聞

いて笑うぜ、女に振られて故郷を捨てた、だってよ。まあ相談とかも乗ってやってくれよ」

少し崩れた感じのする親友だった。でも、男の幼なじみ、そして失恋の痛手を抱える親友に私は優しくしてあげた。

「彼女の気持ちがわからなくて」「もう一度電話しようか迷っているんだけど」「こんな時、女性はどう思うの」……親友の電話は頻繁だった。あの男がつかまらない時は、二人だけで飲みに行くこともあった。

そんなある夜。別れた彼女への気持ちが高ぶったらしく、親友がひどく酔った。一緒に飲んでいたものの、彼氏とは別の男性と二人きり、私はお酒の量をセーブしていた。

「幸恵さんも飲んでよ。悲しい恋に乾杯してよ」

駄々っ子のように言う親友のグラスを受け取る。

「ねえ、呑んでよ」

「はいはい、荒れ過ぎですよ」

仕方なく空ける。

と、一気に酩酊した。なにがなんだかわからなくなる。目の前の風景が溶け出す。寝ているのか起きているのかわからなくなる。

気づいたら、酔っているはずの親友に抱えられていた。

次に気づいたらホテルのベッドの上で裸だった。

(だめ)

心で思うものの体は反応しない。むしろ逆に反応してしまう。

あの男とは比べものにならない快感。親友の腰の動きに合わせて私の体に電気が走る。私のものとは思えない、ひどい獣のような声のどから溢れ出す。

夢と現の深い快感の中で枕元に目の焦点を合わせる。そこには「通話中」の表示になっている携帯が……。

(携帯？ 通話中？)

思考が働かない頭で眺める。と、親友がその電話を取る。

「おい、この女最高じゃないか？ 聞こえてるだろ、雌豚みたいな声だぜ」

(なに？)

反射的に携帯をひったくり、耳に当てる。

「幸恵……」

憤怒の声、あの男の声。

「ち、ち・が・う・の……」

私の「違うの」の台詞も、自分の物とは思えない喘ぎ声に変化している。

私の全てがブラックアウトした。

後日聞かされたくない話。

ある深夜の居酒屋での口論。

「そんなお前、一生愛してるなんて女の建前に決まってるだろ」

「絶対ない！　うちの幸恵は本当に愛してる」

親友、と紹介された悪い友人と、あの男の言い争い。

「だったら、お前以外の男には抱かれなくて自信あるな」

「当たり前だろ、そんな事あるわけない」

「俺が、その女を抱けたら？」

「ありえないよ、そんなの出来たらいくらだって払ってやるよ」

酔った馬鹿な学生の馬鹿な意地。純粹だったあの男は、私の純粹さを信じていた。もちろん信じてもらって大丈夫だった。薬なんて使われなければ。目的のためには手段を選ばない屑のような人間もいることを、男は知らなかった。

男は約束の10万円を支払い、結婚するはずだった私という女を失った。

あの男には高い授業料だった。

私は三日間、部屋に閉じこもった。涙は出なかった。そして悟った。

純粹な愛なんて一瞬で脆く崩れ去る。でも私は、このまま敗者では終わらない、絶対に勝者になる。

恋愛というゲームで、今度は私が、あらゆる男を翻弄してやる。私なら出来るはずだ。何もわからない馬鹿な田舎娘は卒業する。大人の女になる。

馬鹿な男の意地と、たった10万円で踏みにじられた私の幸せ。絶対にそれ以上の幸せを手に入れてやる。男を手玉にとって、世の中のオイシイところを渡り抜く女になる。10万円の、何千倍、いや何万倍の金でしか動かない女になる。愛もお金も、思いのままに手に入れてみせる。私は目が覚めたのだ。

だから、あの男にはむしろ感謝している。

「伊藤幸恵さんですね」

コーヒーカップの赤いルージュから、あふれ出した記憶の蓋を慌てて閉める。目の前の声に、ぼやけていた瞳が焦点を結ぶ。背の高い黒尽くめの女が立っている。

「氷室です」

真っ黒なショートボブ。毛先は左右アンバランス。狙いなのか、ただのザンバラなのか、どうも後者のよう。着ている服も黒、パンツも黒。でも下着は白の気がする。というのは、どこかまだ幼い雰囲気漂うから。顔はぞっとするくらい整っている、鼻筋も通り瞳も切れ長の美人顔。でも表情がない。そしてどこか挙動不審。伏し目がちに

辺りをうかがう姿は、体の芯が通っていない、背の伸び過ぎてしまった小学生のよう。

<LOVE GAME 参加おめでとうございます>

氷室冴はテーブルの向かいに座り、そう書かれた一枚のプリントを差し出す。

「読んで下さい」

「あなた、これって……」

勝手に進んでいく話を遮って、ペースをこちらに戻そうとする。そんなことは意に介さない彼女。

「とにかく読んで下さい」

淡淡と事務作業のような口調で続ける。どうやら、私との会話は御希望でないようだ。向かいに座っても、時折チラリと上目遣いで私の表情を盗み見るだけで直視しようとしなない。おどおどしているようにも見えるが、なにかが物珍しくてあたりを観察しているようにも見える。待っても話し出す様子がないので、仕方なくプリントに目を通す。

<LOVE GAME 参加おめでとうございます。これは『1億円』をかけたゲームです。貴方には、貴方のために用意された簡単なゲームに挑戦していただきます。御安心下さい、それほど難しい内容ではありません。そして、成功したら1億円を差し上げます>

唐突な話。LOVE GAME？ どんなゲーム？ 1億円ってどういう事？ 私の頭は疑問符だらけ。

<当LOVE GAME財団は非営利団体で、その目的は愛の本質を知ることです。誰もが恋愛をします。そして時に喜び、時に苦しみ、愛が実ることになれば、別れが訪れることもあります。愛には様々な形があると思います。>

しかし、その本質は何かシンプルな物で構成されているのではないのでしょうか？残念ながら、私たちにはその答えがまだわかりません。

そこで、様々な方に『愛にまつわるゲーム』に参加していただき、その経過、結果から、愛とは何かを知りたいと考えております>

LOVE GAME財団？ 聞いたことない。愛の本質？ いきなりアナログな言葉。宗教？ 詐欺？ まだ意味不明のプリント。しかしその次の行から突然、よく知っている言葉が並ぶ。

<伊藤様を、会社での水野様との件、取引先の小田原様との件、ヒルズパーティーでのトンプソン様との件など様々に調査させていただき、今回の研究対象として最適であると判断させていただきました>

懐かしい名前が次々並んでいた。

水野知治。同期入社、年下の正社員。一緒に街

を歩くと大概の女が熱い視線を送るいい男。私を彼女にしたくて、若いパワーで連日のようにお誘い。押し切られる形で付き合った。

でも、若さ故の所得の少なさは如何ともしがたかった。

デートで、会社帰りのサラリーマンがたむろするような店に連れて行く男は、いかに見た目が良くても、受け付けられない。お洒落居酒屋を頑張って選んでくれても所詮はニセモノ、どこか気分が貧しくなった。

小田原豊。IT系のベンチャー経営者。若くして成功を収めた出来る男。財力は抜群。迷わず私は恋人になった。

でも、身体に問題があった。肥満で薄毛。

仮に結婚したとして、私の遺伝子と、この男の遺伝子が掛け合い生まれてくる子供が可愛そうである。自分の子供なのに愛せなくなってしまうような恐怖がよぎった。別れる時に逆恨みで、うちの会社を取引停止にするしないで、大もめになったのは、もう昔の話。

マイク・トンプソン。外資系のディーラー。誘われたパーティーで私にしつこくつきまとったアメリカ人。財力もルックスも合格。

でも、性格に問題があった。

「友達も呼んだけど……」とベッドルームに他

の男を呼んで3Pをしたがる変態男。ストレスが日常化する仕事とはいえ、発散といっても付き合える範囲を超えている。

それにしてもよく調べたものだ。

知らない間にあれこれ調べられていたのは心外だが、私の周りを調べれば、多少派手な恋愛遍歴について尾ひれをつけて喋りたくなる人間は少なくないだろう。思い出さなくていい懐かしい男たちとのシーンが頭の中で溢れそうになるが、今はこの胡散臭い話の中に、本当に1億円が埋まっているのかに集中することが先決。

「伊藤さん、これ……」

私がプリントのそこまで目を通したのを確認したのか、氷室冴がボストンバッグをテーブルの上に置く。

「開けてください」

開けたら爆発？ いや、爆発させる意味がない、それに氷室自身も巻き添えになる。中に死体の一部？ いやいや、怖いニュースの見過ぎだ。ここに死体がある意味がない。躊躇している私を見て氷室。

「大丈夫ですよお」

主導権を取られカチンと来る。勢いでバッグを開ける。

「あっ」

思わず声が出てしまった。意味もなく辺りを見回してしまう。中身をテーブルに出しても良いのに、やはり取り出すことはためらわれ、バッグの中をがさごそと掻き混ぜる。

1億円。

帯封付きの100万円の束が無造作にねじ込まれている。ざっと見ても数十束、多分100束で1億円なのだろう。

その手触りと、香りにうっとりする。

100万円の束。そこまでは会社の仕事で、見た事もあるし触った事もある。平静な顔をしていたが、100万円の束を扱っているときの私は昂揚していた。その100倍の恍惚が目の前にある。

「本物？」

「もちろん。続きを……」

私の目を見ないで、手元をモゾモゾさせながらプリントの先を読むように促す氷室冴。何か手遊びをしているのか私を無視したような様子にカチンと来る。でも今は、この小娘の態度に怒るよりこの話の中に潜んでいる嘘は何なのか、最大の冷静さで検証しなくてはならない。私の頭がフル回転を始める。

〈先日振り込ませていただいた100万円と、ここに99束、合わせて1億円あります。

この1億円は本日お持ち帰り下さい。そして本

物であることを確認していただくため、どの銀行の、どの店舗でも構いませんので、ディスペンサーに、気が済むまで通してみてください。問題なく処理さるはずです〉

持ち帰っていい？　どういう意味？　どこでも良いからディスペンサーに通してみろ？　これが偽札でない証拠、本物の1億円ということなの？

〈もちろん、この1億円は預かり証などいただきません。そして、その後は安全を期して、どの銀行でも構いませんので、貸し金庫に入れられることをお勧めます。これで、この1億円は伊藤様しか使うことが出来ません。伊藤様にはゲームし集中していただけます。ここまでは御理解いただけただでしょうか〉

確かに一見、話は通っている、矛盾はない。でも、証文を取らないということは、持ち逃げができる、相手もそれほど馬鹿じゃないはず。

〈しかし、もちろん差し上げたわけではありません。ゲームに成功するまでお預けするだけです。成功したら、そのまま伊藤様のものです。しかし、もし失敗したら全額返還していただきます。

ちなみに、ゲームに同意いただきますと、本日からゲーム終了まで、伊藤様には当財団の完全監視がつきます。この1億円を持ち逃げすることは

不可能です>

監視？ どのレベルの監視？ そもそも、財団ってどんな規模なのか？ 私の中のセンサーは相変わらず警報を鳴らしている。猛スピードで検証する。お金にまつわる胡散臭い話はいくつも経験がある。確認しなくてはならない本質はそう多くはない。まずはリスク。

「失敗したら1億円返すだけで良いの？」

「先を読んで下さい」

相変わらず手元をモゾモゾさせているだけの女。見ると、小さな鶴。テーブルの紙ナプキンを千切って作った折り鶴が一羽。人が真剣に考えている前で折り紙遊び？ いったい何なのこの女。

「伊藤さん、書いてありますよ」

年の頃なら二十代前半だろうか、決して子供といえる年ではないのに折り紙遊び、なんでこんな女が財団の使者？ いや、女の事より今は1億円が優先。

<突然の話に困惑されているのは理解できます。そこで、よくあるご質問をFAQにまとめます。

Q、失敗したら1億円返すだけで良いのですか？

A、その通りです。

Q、参加費はかかるのですか？

A、一切いただきません。

Q、預かった1億円に利子が発生したりしませんか？

A、ございません。ゲーム失敗の場合は1億円を返していただくだけです。

Q、ゲームの途中で、継続のための出費を強いられることは？

A、そのようなことは一切ありません。ゲーム途中も、終了後も、プレイヤーが強制的に費用の負担をすることはありません。

Q、なぜ、こんなゲームをするのですか？ LOVE GAME財団のメリットは何ですか？

A、LOVE GAME財団は非営利組織です。その目的は『愛の本質を知ること』です。これは、色々な研究所がやっている研究と同じと思ってください。株で儲かる方法を研究する。汚れた川をきれいにする方法を研究する。お料理が美味しくできる方法を研究する。簡単に痩せる方法を研究する。愛の本質を研究する。どれも同じ研究テーマと考えて下さい。研究のためには研究費が必要です。我々には多くの研究資金がありますので、プレイヤーがゲームに成功し1億円差し上げることになっても、年間予算の範囲です>

わかるような、わからないような説明。目を閉じて集中する。頭にかかりそうになる白い靄を懸命に追い払う。まだこの話には、確認しなければ

ならない落とし穴がいくつかある。

質問しようと目を開けると、目の前の折り鶴が10羽ほどに増えている。しかも、段々と大きさが小さくなっている。この状態で、人の目も見ず極小の折り鶴を折り続ける氷室冴に、軽い恐怖感を覚える。危ない話をもってきた悪魔なのか、万に一つのオイシイ話を運んできた天使なのか。見極めなくてはならない。

「1億円預かって、私がそんなこと知らぬ存ぜぬを通したら」

「いいですけど、その場合はゲーム放棄として、強行班が取り返しに行きます」

「1億円もって拾得物として警察に駆け込んだら？」

「関係ないです。必ず、伊藤さんから1億円を回収します」

「ヤクザの所に駆け込んだら？」

「同じです」

「強制班って……」

「警察も、ヤクザも怖くない人たちです。もし全部なくなっても、伊藤さんくらいキレイなら、三年も我慢すれば返せると思います」

怖いことを平然という。警察もヤクザも怖くない連中。ヤバイ系の男友達から聞いたことがある。東京のアンダーグラウンドを暗躍する外国人マフ

ィア。国外逃亡が前提だから、なにも恐れない。そしてわずか数十万円のお金で平気で人を殺す。そういう連中が、私たちの生きる世界と薄皮一枚隔てた裏社会には存在するそう。そんな荒事に長けた連中を雇っているということだろうか。そして、私はさらわれ、風俗、いやもっと金を生む、逃げることも出来ない性産業で三年間働かされるということだろうか？ そんなのは、どう考えても御免である。強制回収班は勘弁願いたい。どんな男も手玉にとって、オイシイところだけ渡り抜く、そんな女になることを誓ったが、命まで賭けるもんじゃない。それじゃ楽しくない。

「ところで、誰がなんのために、こんな事やっているの？」

「誰かは言えませんが、沢山お金を持っているある人が『愛の本質』を知りたいと」

「金持ちの道楽にしては度が過ぎているわ」

「私にはよくわかりません」

目の前の折り鶴はテーブル一面に広がりつつある。どんどん小さくなるのに、ひとつを折るペースが上がり続けている。

そろそろ陽は傾き、窓際の私たちのテーブルまで日差しが延びてきた。グラスの氷はすっかり解け、汗がコースターを濡らしている。

「そんな、貴方たちの財団が……なんていうのか

な、本当にそんな力を持っているのか。何か証明できる？」

「こんな物で良ければ」

氷室は折り鶴を折る手を休めず一冊のファイルを差し出す。なんの変哲もないファイルを開けてみて私は息をのんだ。

写っていた。全てが写っていた。

通勤電車の私。オフィスで仕事をしている私。レストランで食事をしている私。カラオケで歌っている私。バーで飲んでいる私。夜道の暗がりですすんでいる私。ジャージ姿でランドリーにいる私。そして、ベッドで眠っている私……。

いつ、どこで、誰が？ 職場も会員制のバーも、そして自宅の中まで、ハッキリと写っていた。全く気づかなかった。LOVE GAME財団がどんな規模で、このゲームを運営しているのかがわかり、少し背筋が寒くなる。

それと同時に1億円の現実味が少し増す。それがあれば、ここ数年、私の心の片隅にある、あの不安が解消される。

結婚。

あの不幸な事件がなく、あのまま、あの男と結婚してしたら「夫と一緒に苦労するのも悪くない」と思うような良妻になれたと思う。でも、たった10万円で踏みにじられた私の幸せ。その代

償は、やはりお金で埋めてもらうしかない。結婚相手の年収は普通の額ではあり得ない。絶対に許せない。

その日以来、男を選別し続けた。もっとお金の
ある男、もっと条件のいい男。

そして28才ともなると理想は青天井になる。
私の結婚相手として満足いく男性はそうは出逢
えない。会社の同僚、IT系社長、外資系ディー
ラー……誰も合格できなかった。

人格も合格、財力も合格という男性はいないこ
とはない。でもそんな好条件の男は、必然的に4
0代以降の既婚組。一時期の遊びなら問題はない
が、結婚相手となると超えなくてはならないハー
ドルが多すぎる。私もそこまで熱くなれるほど、
もう若くはない。

でも、1億円あったら……。

全ての悩みは解消される。収入がなくても良い、
若くて将来性のある男と、すぐにでも結婚する。
そして食事の趣味も、ファッションの趣味も、男
としての品格も、全部私が磨いてあげるのだ。時
間と、お金をかけて立派な男性にしてあげる。き
っと沢山稼ぐ夫になるだろう。そんな何度も夢見
た選択肢が現実の物になるのである。

「伊藤さん」

その声に我に返る。目の前の氷室冴が催促している。テーブルに置かれたプリントは、周りが既に白い折り鶴で埋め尽くされている。1億円の妄想の扉を閉めて続きをめくる。そこにはゲームの内容が書かれていた。

〈伊藤幸恵さんへのLOVE GAME、『1週間以内に結婚をすること』。成功したら1億円差し上げます〉

脳みそが一瞬の空白。まるで心を見透かされたような驚き。その後の私は多分、口角が45度まで上がっていたかもしれない。

(なんで……そんな簡単なこと……)

1億円もらえたら選り取り見取りで、誰と結婚しようか迷う位なのに、その条件が『誰でも良いから結婚するだけ』で良いなんて。願ってもない。朝飯前である。こんな簡単なことで1億円なんて。

「OKみたいですわね」

私の顔がうっすらと笑っていることに気づいた氷室が切り出す。

「でもなんで、こんなことで」

「GAMEの内容は財団が決めました。私にはわかりません」

私の頭の中で天使と悪魔が交錯する。

(やめた方がよいよ。何があるかわからないよ)

天使の声は小さい。悪魔は満面の笑みで言う。

(何があるかわからないから面白いんじゃない)
(あれ、尻込みするような女だったっけ)
(世の中のオイシイところ、渡りきるんじゃないの)

(伊藤幸恵なら出来るわ。普通の女じゃ無理)
(やばくなったら、泣きつける男、いくらだっているじゃない)
(貴方の為なら、どの男だって助けてくれるわよ)

(1億円のチャンスよ)
(失敗したってチャラでしょ)
(命まで取られるもんじゃないわ)
そして悪魔は決定的な言葉を吐く。
(たった10万円で始まったあなたの不幸が、1億円で実を結ぶなんて願ってもないじゃない)

今日の悪魔は饒舌だ。
最後に一言だけ、瀕死の天使がつぶやく。
(こんな話あるわけないわ。1億円をノーリターンで賭けるほど、力のある団体なんてあるわけないわ)

まさか、その声が氷室に聞こえたのだろうか。
彼女が窓の外を指さす。

「では、紹介します。これから一週間、伊藤さんのゲームを見守るLOVE GAME財団のメンバーです」

街の風景に異変が起きた。雑踏の風景のあちこちが、そこだけ時間が止まったように固まる。ただの街行く人たちが一斉に、こちらを見ている。10人……20人……そんな数じゃない、50人、100人いるかもしれない。立ち止まりじっと私を見ている。

氷室が合図を出す。全員が、元の風景に溶け込む。何事もなかったように街が動き出す。わずか数秒。数秒だったが、この風景の中にいる財団メンバーが確かに私を見つめていた。

（これほどの規模……）

私の目に妖しい光が宿っているのを氷室はわかっているようだ。

「よろしいようですね。では、今からちょうど一週間後、日曜日の5時47分までがプレイタイムです。相手にゲームであることを告げての結婚は無効となります」

私の覚悟は決まった。

「伊藤幸恵さん、LOVE GAME、スタートです」

氷室冴が宣言する。

窓からの一陣の風がテーブルの上の白い鶴たちを飛び立たせた。

（この続きは、メルマガ登録すると無料で講読可能です！）

メルマガ登録はこちら：<http://www.adachimotoichi.com>